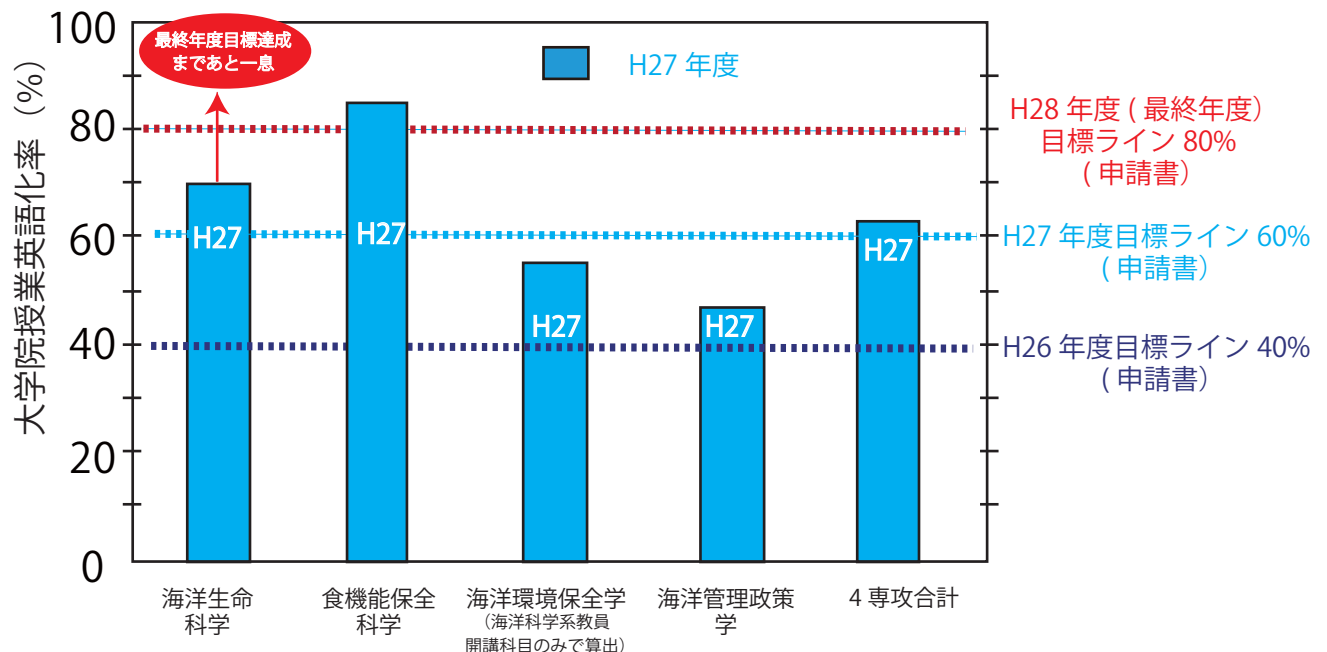


# まだ、大学院授業を 英語化していない先生方へ

この小冊子は、平成27年度前学期終了時点で大学院授業の英語化に踏み切っていない先生方へ向けて書かれています。

まずは、下記のデータをご覧ください。

## 平成 27 年度 大学院前期課程英語化について



大学院授業英語化率 (平成 26 年度実績と 27 年度見込み)

上のグラフは平成27年3月の海洋科学部教授会で、大学院授業を英語化していない教員へ向けてお願いした際に用いたものです。

専攻により、ばらつきが大きくなっています。経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業での平成28年度目標は、4専攻平均で80%の科目の英語化です。

大学院授業は事業評価のために行っているわけではない！

というお考えもごもっともです。また、「絶対に授業は英語化しない」とお考えの先生方はこの小冊子を読み飛ばしてください。以下は、英語化はしてもよいと思っているが、英語化への疑問点や不安が解消されず、現時点で英語化へ踏みきれていない先生方や、日々忙しくて、結局今年も英語化は先送りにしてしまおうと思っている先生方に向けてのメッセージです。

まず、

・英語化ということは、ある日突然授業をすべて英語にしてしまうことなの？現状の教員の英語力や学生の英語力では、これまで伝えていた専門レベルが低下してしまうのでは？

という疑問です。

ご安心ください。

英語化の定義ですが、英語化とは授業を「すべて」英語で行うことではありません。最初から最後まで教員が英語で授業を行い、学生も英語で質疑をすることができれば、これにこしたことはありません。

しかし、教員側も、「ここは複雑すぎて、どうしても英語で表現できない」という部分があれば、躊躇なく日本語で補足してください。

あるいは、教員が英語で説明できても、学生が今一つ理解できてなさそうだな、と感じれば、Are you following me? などと聞いてみて、学生が首を横にふれば、躊躇なく日本語で補足してください。

たとえ、英語による授業を行っても、学生に内容を理解してもらえなければ、大学院教育の質は逆に低下することになり、元も子もありません。英語化は本学の大学院教育の革新的なレベルアップが目的です。

つぎに、

・自分の英語の発音や稚拙な表現力では、学生に失礼なのでは？  
という疑問です。

こちらも心配無用です。

そもそも、なぜ、博士前期課程の授業を英語化しなくてはならないかを考えてみてください。

それは、現時点での本学の修士修了学生は、研究レベルは負けていないにもかかわらず、即興での意見交換を求められる国際的に知的な論理を戦わせる場において、ほとんど言葉を発することができないからです。先生方が、国際的な学会やプロジェクトで国際舞台に学生を連れて行った場合、コミュニケーションはすべて英語です。その時、ご自分の発音や表現力を気にしますか？

**国際舞台では、与えられた時間内で沈黙しているとすると、これは致命的です。**

自ら汗をかきながら、つたない英語で専門を伝えようとする教員の姿こそが、学生へ見本と励ましになるのではないのでしょうか？流暢な日本語で一方的にまくしたてる授業よりは、学生に何かが伝わっているかもしれません。

また、教員は流暢に話せる日本語で一方的に話すのではなく、つたない英語で四苦八苦して伝えようとする過程で、必要不可欠なエッセンス、すなわち、論理的なロジックに頼らざるを得なくなり、結果として教員、学生ともにロジックが鍛えられることになるのではないのでしょうか。

**大学院授業の英語化は、単なる英語力だけではなく、学生のロジカルマインドに大きな変革をおこすためにあります。**

さらに、

**・資料を英語に直す準備が大変でハードルが高い**  
という悩みです。

こちら、もちろん基本的には資料は英語にすべきですが、平成27年度後学期や平成28年度前学期までに忙しくてそのような暇がないという先生方は、とりあえず講義資料は日本語のままで、講義だけ英語ではじめてみてはいかがでしょうか。それでも、立派にシラバスにEマークをつけられます！

つまり、この冊子でお伝えしたいのは、このような変革の時（ある意味チャンスです）は、いろいろ慎重に考えずに、まず1歩踏み出してみることです。英語授業に限らず、いきなり完璧な授業など、土台無理です。やりながら考えればいいのです。海水浴でも、水が冷たいかもしれないと思っていつまでも陸にいと、楽しい1日は過ぎ去ってしまいます。まずは飛び込んでみてはいかがでしょうか？

習うより慣れろ、です。



以下は付録です

なんだ、こんな乱暴なメッセージだけで、英語化を促すのか？

とお思いの先生へ。

一口に英語化授業といっても、いろいろなやり方があります。

例えば、

木村の例（反転授業）

あらかじめ日本語音声入りのスライドショーpptを作成しておき（毎授業15分程度）、学生にメールで配信するか、ユーチューブ限定公開にて配信する。メール配信は、平成26年度のやり方ですが、平成27年度（後学期）はユーチューブ限定公開にチャレンジ予定です。日進月歩です。

学生たちがあらかじめ日本語で内容のエッセンスを予習して英語授業に臨みますので、基本的な事項はしっかり伝わります。

その他にも、過去3年間での経験からいろいろとお伝えしたいことはあります。

そこで、

## お知らせ（予告）です

2015年8月から、2か月に一度、英語化をすでに実施している教員群による、英語授業のやり方紹介のFDセミナーシリーズを開始する予定です。毎回、二人ずつ程度紹介してもらいます。

また、英語化実施教員群から比較的経験年数の長い教員群に「英語化授業メンター教員」に就任してもらい、英語化を行っていない教員たちからの個別相談に随時対応できる体制にしますので、こちらもご期待ください。

さらに、

**平成27年度後期または平成28年度から英語化を実施する予定の教員の皆様！**

今夏から、無料オンライン英会話研修を開始します。オンライン英会話研修では、研究室にいながら、自分のペースで英会話にチャレンジできます！この機会にぜひ応募し、授業の英語化にチャレンジください！

Probably easier said than done. But things are moving at full speed ahead. If you're not overly analytical, you can become a very interesting person. We're here to support you with your challenge!!

文責：グローバル人材育成推進室副室長 木村 凡